

P A ガ J P S

2020
vol.37

Association
Japonaise de la

Presse
Sportive



RUGBY

WORLD

CUP

JAPAN

日本 2019

"South Africa win the World Cup Final" ©Takashi Ito

03

Canon

make it possible with canon



誰も見たことのない世界へ。

「1」という言葉のほかに、この一眼レフを形容する言葉があるだろうか。

プロフォトグラファーから選ばれ続ける理由は、

決定的瞬間を刻み込んできた膨大な写真の中にある。

そのフラッグシップは今、さらなる限界を打ち破り新次元へ到達。

意志に応え想像を超える、EOS-1D X Mark III。

世界にはまだ、見たことのない瞬間が待っている。

2020年2月発売予定

NEW EOS-1D X Mark III



◎キヤノン EOS-1D X Mark III ホームページ
canon.jp/1dxmlk3



◎キヤノンお客様相談センター
デジタルカメラ・交換レンズ
050-555-90002

【受付時間】平日・土 9:00～17:00(日、祝日、12/31～1/3は休ませていただきます。)※海外からご利用の方、または050からはじめIP電話番号をご利用いただけない方は043-211-9556をご利用ください。※受付時間は予告なく変更する場合があります。あらかじめご了承ください。※受付日の詳細は受付日カレンダーでご確認ください。
<https://web.canon.jp/e-support/information/tel-calendar-cc.html>

キヤノンマーケティングジャパン株式会社

魂ふるえた

One Team ラグビーW杯

文／松瀬 学

RUGBY
WORLD
CUP
JAPAN
日本 2019



日本代表はベスト8に目標を置き、過酷な長期合宿（2019年は約240日）に取り組んだ。チームに必要なのは、最後に「チームラブ」だろう。日本代表はハートワークに込み、「君が代」をみんなで練習した。宮崎合宿では歌に出てくる「さざれ石」を見に行つた。広島、長崎への原爆投下の歴史も一緒に勉強した。だから、ワントームになつた。

ジェイミーは大一番のアイルランド戦の試合直前のミーティングでこう檄を飛ばし、選手を鼓舞した。信じることを信じよう、と。

「僕らが勝つことを誰も信じていない」となるとも思っていない。僕らが歩んできた道のりを誰も知らない。自分たちしか知らない信じられるのは自分たちだけ。自分たちがやってきたことを信じよう」

日本代表は準々決勝で南アフリカに完敗し、終戦となつた。5万の大観衆で埋まつたスタンドからあたたかい拍手と歓声が降り注ぐ中、リーチ主将が円陣で声を絞り出した。

「みんなを家族同様に思つてきた。下を向く必要はない。このファミリーをキープ」として誇りに思つている

「笑わない男」として人気が出たプロップ畠啓太が、ろつ骨を痛めたスタンドオフの田村優が、「ジャッカルの鬼」のナンバー8姫ムラブ」だろう。日本代表はハートワークに込み、「君が代」をみんなで練習した。宮崎合宿では歌に出てくる「さざれ石」を見に行つた。広島、長崎への原爆投下の歴史も一緒に勉強した。だから、ワントームになつた。

日本代表はハートワークに込み、「君が代」をみんなで練習した。宮崎合宿では歌に出てくる「さざれ石」を見に行つた。広島、長崎への原爆投下の歴史も一緒に勉強した。だから、ワントームになつた。

日本が南アフリカに挑む際、国歌斉唱でのスクランブルハーフ流大の涙。その南アフリカのシャ・ヨリシ王将の空にシンがフラッシュバックする。

新宿の安酒場でギネスを喉に流し込む。日本の安酒場でギネスを喉に流し込む。前回のライターにとつては、まさに夢のごとき、4日間だつた。

日本代表がアイルランドのスクランブルを押し切つた時のプロップ具智元の咆哮。その具智元がスコットランド戦で負傷退場する際に流した悔涙。

日本が南アフリカに挑む際、国歌斉唱でのスクランブルハーフ流大の涙。その南アフリカのシャ・ヨリシ王将の空にシンがフラッシュバックする。

日本が南アフリカに挑む際、国歌斉唱でのスクランブルハーフ流大の涙。その南アフリカのシャ・ヨリシ王将の空にシンがフラッシュバックする。



ジャパンの
道のり
文／生島 淳

日本がロンドンでイングランドと
対戦した2018年11月17日の晩、
アイルランドはダブリンでオールブラックスに
感動的な勝利を収めていた。
その試合を観て
「年後、アイルランド戦の勝算は
極めて薄い」と思われたが、
イングランドに善戦した選手たちには、
違う景色が見え始めていた。



転機



イタリア戦 2018年6月 大分 ©Shinji Akagi

2018年はサマー・テストでイタリアと1勝1敗。ジェイミーは「2戦続けていいパフォーマンスが出来ない」と課題を挙げ、その克服に着手することになった。W杯の開幕まであと1年となつたこの年のW杯で合宿を張ったジャパンはボーラーを使わない走り込むトレーニングと、「ダブルセイティの持つ意味」について考える機会を持た。

9月、和歌山で合宿を張ったジャパンはボーラーを使わない走り込むトレーニングと、「ダブルセイティの持つ意味」について考える機会を持た。

ジェイミーは、多国籍からなるこのチームは海外出身の選手たちが得意とするところだが、外国生まれの人間は協調性に欠ける部分がある。そうした違いを踏まえた上で、一緒にチームを作っていく」

地元開催のW杯、そろそろチームをまとめなければならぬ時期に来ていた。リーグも

積極的に発言するようになつた。そしてこの年のオータム・テストで日本は手応えを得る。

11月3日に行われたオールブラックスとの対戦では大敗を喫したが、2週間後の17日にトライ・ケナムでエディーさん率いるイングランド代表と対戦し、前半を15対13となりました。後半は零封され、最終的には15対35で敗れたものの、この試合で選手たちは自信を深めた。リーチはいう。

「トライ・ケナムで、イングランド相手に前半のような素晴らしいゲームが出来た。接点では負けていなかつたし、セットプレーからの仕掛けも効果的で。これで絶対にW杯でアイルランドとスコットランドには勝てると思いました」

日本がイングランドと対戦した夜、アイル

ランドはダブリンでオールブラックス相手に

感動的な勝利を収めていた。

「来年、このチームと対戦しなければならないのか」私はロンドンのバブでこの試合を見ながら、来年のW杯でアイルランドに勝つのは至難の業に思えた。

しかし、選手たちは違う風景が見えてい

た。最後の仕上げは、19年に入つての地獄の

ような合宿だった。

松島幸太郎 W杯ロシア戦 2019年9月20日 東京 ©Shinsuke Ida



イングランド戦 2018年11月 ロンドン ©Shinji Akagi

W杯へ

エディー・ジャパンに比べ、ジェイミー・

ジャパンはメディアがアクセスする機会が少なかった。W杯イヤーに入り、2月からスタートした合宿でも、チームの全容をうかがう

ことは難しかつた。

選手たちは厳しい合宿をこなしていたが、7月にバシフィックネーションズ・カップで

フィジー、トンガ、そしてアメリカに勝つたもの、全容が明らかになつたのは9月5日、熊谷で行われた南アフリカとのテストマッチである。この試合、日本は南アフリカFWの

圧力に屈し、なおかつマフィ、福岡を負傷退場で欠くことになつた。なぜ、開幕の2週間前に巨人、南アフリカと戦わなければならなかつたのか。私を含めたメディアはそれを疑

問に思つていた。しかし、ジェイミーは毅然としていた。

「合宿の内容はハードで、これだけのものを積み上げたのだから、バシフィックネーションズ・カップで勝つのは当然だと思つてしまつた。そこで、W杯までもう一度選手たち

は謙虚になる必要があつた。だから南アフリカとの対戦を組んだのです。あの試合を戦うことで選手たちは自分たちに足りないものが見えたはずです」

そしてジェイミーは私にこう話した。

「南アフリカと対戦するリスクは、対戦しないリスクよりもはるかに小さい」

つまり、本番前に本当に強いチームと戦うことが必要だとジェイミーは信じていた。

そしてW杯の幕が開く。

初戦のロシア戦では緊張から内容が思わしくなかつたが、第2戦のアイルランド戦で日本は合宿の成果を見せる。

そしてW杯の幕が開く。

初戦のロシア戦では緊張から内容が思わしくなかつたが、第2戦のアイルランド戦で日本は合宿の成果を見せる。

2年前、同じエコパ・スタジアムで大敗し

た相手に一步も引かなかつた。

そしてW杯の幕が開く。

初戦のロシア戦では緊張から内容が思わしくなかつたが、第2戦のアイルランド戦で日本は合宿の成果を見せる。



スクラムを押し勝った具選手とジャパン FW
W杯アイルランド戦 2019年9月28日 静岡
©Hiroyuki Yakushi



「チーム作りの土台となる『ファウンデーション』が全体の70パーセントを占めます。残りの30パーセントがゲームウイークに入つてから。そこで仕上げればいいだけです」

合宿で築かれた強固な土台が日本を支えたのである。

翌週のサモア戦でも4トライを奪つてボーナスポイントを獲得すると、悲願のベスト8進出はブール最終戦のスコットランド戦に懸かることになつた。

しかし、このゲームウイークには台風19号が来襲し、3試合が中止になつた。日本対スコットランド戦も開催が危ぶまれたが、関係者の尽力によって試合は予定通り行われた。



©Naoyoshi Sueishi(10)



©Takashi Ito



堀江翔太から始まったオフロードバス。ジェームス・ムーア、ウィリアム・トゥボウと繋ぎ、稻垣啓太の代表初トライを導く。W杯スコットランド戦 2019年10月13日 横浜

そしてこの試合、ジャパンのアタックが結果的に寒える。奪った4トライは、いずれも練習の成績が出たものだった。

1本目、福岡からのオフロードバスを受けた松島がトライ。

オフロードはジェイミーが就任した時から強調してきたスキルで、福岡は「去年の秋から、重点的に取り組んだのが結果になりました」と笑顔で振り返った。

2つ目のトライは、オフロード祭り。堀江がクルッとターンして相手を外すと、ジェームス・ムーア、ウィリアム・トゥボウが続き、それで最後は稻垣がトゥボウからのバスを丁寧に受け取ってゴール下にトライ。

これまで外側でトライを重ねることが多かったジャパンだったが、このときばかりはど真ん中をぶち抜いてトライを奪つた。

3つ目は前半終了間際、ドロップアウトか再開されたボールを確保すると、瞬く間に数的優位を確立し、ラファエルティモシーがキックを転がすと、福岡がトップスピードでこれをキャッチして、そのままトライ。

そして4つ目は、ディフェンス全体でストランドヘブレッシャーをかけると、外側から詰めた福岡が相手のボールをかき出してつかみ、40mほどを走り切った。

最後はスコットランドの猛攻をしのいで、初めての準々決勝進出。日本のラグビーの歴史が変わった瞬間だった。

だが、翌週は南アフリカに敗れた。

前回のW杯以降、なにかと日本との因縁が取りざたされる国だが、彼らのフィジカルパワーに日本は圧倒された。

抵抗の末の敗退。日本が列強と伍する力を示したW杯だった。

この4年間、ジャパンを見続けてきてもつとも印象に残っていることは「歓声」である。特にアイルランド戦が行われたエコパ・スタジアム、アイルランドからやってきた大応

第一次の準々決勝進出。日本のラグビーの歴史が変わった瞬間だった。

前回のW杯以降、なにかと日本との因縁が取りざたされる国だが、彼らのフィジカルパワーに日本は圧倒された。

抵抗の末の敗退。日本が列強と伍する力を示したW杯だった。



W杯 アイルランド戦 2019年9月28日 ©Shinji Akagi

援団が歌をうたいだすと、それにかぶせるようにして日本のファンが「ニッポン！ ニッポン！」と声を振り絞る。

プレーと観客がシンクロし、信じられないような空間が生まれていた。

私は歓声を聞きながら、「ここはまるで、ヨーロッパのスタジアムみたいだ」と感慨に満っていた。誰からも応援を強制されることなく、自然発生的に起きた歓声。それは日本の「宝」と言つてよかつた。

その歓声をもたらしたのは、間違いなく選手たちである。

2年前はジェイミーが唱える戦術に疑問を感じていた選手たちが、100パーセント方向性を信じるようになり、それは世界に誇れるクリエイティブなラグビーへと昇華した。

フィジカルとディフェンスが席巻したW杯で、日本は独自のラグビーを世界へプレゼンテーションすることに成功したのである。

だからこそ、ファンは呼応し、素晴らしい空間が日本で生まれた。

W杯のレガシーがあるとするなら、私はあの日のエコパ・スタジアムの歓声を運ぶ。日本のラグビーに携わっていた人間が作りだした奇跡の空間がそこにあった。

その記憶こそ、最高のレガシーだと私は思う。

03 Rugby World Cup Japan 日本 2019

魂ふるえた One Team ~ラグビーW杯~



Cover Photo
新国立競技場 ©Michi Ishijima

07 ジャパンの道のり

17 Interview

渡部暁斗

「メダルへのこだわり」

21 5ATHLETES

八村星
フェアリー ジャパン POLA
西田有志
鈴木雄介
国枝慎吾

33 Interview

中谷吉隆

「1964-2020 社会派スポーツカメラマンが語る56年」

40 ROAD TO 東京 2020

バレーボール男子日本代表
バスケットボール男子日本代表
渋野日向子

SONY



私たちのミラーレスが
世界で支持される理由。

国内外において数々の栄誉ある賞を受賞し、カメラで表現する人々から支持をいただいているミラーレス一眼α。

過去の常識にとらわれずまだ見ぬ映像表現を生み出すために。私たちは誇りをもってミラーレス技術を磨き上げてきた。

高度な物体認識を可能にするAI技術と高速データ処理性能によって実現した、動物にも対応する「リアルタイム瞳AF」*。

表現者の集中を妨げない「ブラックアウトフリー高速連写」。

専用設計レンズ、イメージセンサー、画像処理エンジン、ソフトウェアアルゴリズムを自ら開発してきたソニーこそが実現できたこと。

一筋に究めてきたミラーレスカメラシステムで先進的な技術を誰もが手にできるαは

これからも写真に向き合うすべての人の想いに応え続ける。

*リアルタイム瞳AFの動物対応はソフトウェアアップデートが必要です。対応機種やアップデート時期について詳しくはソニーの製品情報をご確認ください。

表現に革新をもたらす5つの基準

高画質 スピード 機動性 スタミナ 専用設計レンズ

表現に革新をもたらすα、5つの実力。
詳しくはこちら [\[α支持される理由\]](#) [検索]



長年の信頼 HCLファインアートプリントサービス

作品のイメージを極限まで表現した「ファインアート・プリント」を国内外有数のアーティスト用紙でご提供します。



イルフォード
ゴールドファイバーシルク

高い鮮鋭度、広い色再現域、優れた長期保存性、往年の
白黒写真のようなシルキーな黒とクリーミーな白を再現できます。

クリエイティブなテクニックを可能にし、
創作力を最大限に発揮した作品制作ができます。

ILFORD
CERTIFIED PRINTER PARTNER
イルフォード認定プリントパートナー

ハーネミュール
フォトラグ

精細で滑らかな面質により多目的に使え、
モノクロとカラー写真のどちらにも適し、
深みを感じる絵画的な作品に仕上がります。

ハーネミュール
ファインアート バライタ

深い色合い、上質な光沢と質感、広い色再現域、
高い最大濃度と滑らかなグレーの階調表現で、
特にモノクロ写真に最適です。

株式会社
堀内カラー

フォトイメージングセンター フォトアート課
東京都千代田区神田小川町2-6-14
☎(03)6854-9581

フォトイメージングセンター 営業課
東京都渋谷区神宮前3-41-6
☎(03)3479-5351

関西営業部 営業課
大阪府大阪市北区万歳町3-17
☎(06)6313-2351

ファインアートプリントサービスの詳細やご注文はホームページから … www.horuchi-color.co.jp webからも注文できます!

Interview
Akito Watanabe

Commitment
to medals



©Shinji Akagi

AKITO WATANABE

文/折山淑美

メダルへのこだわり

ノルディックコンバインドの渡部暁斗が、2017～18年シーズンに初めて達成したW杯総合優勝。それは彼にとって、14年ソチ五輪と18年平昌五輪の銀メダル以上に価値のあるタイトルだった。「僕はずつとW杯総合こそが一番だと思っていたし、それが本当の世界一になることだと思ってやってきたので。自分の中の納得度としては100点満点で、達成感はすごくありました」と、誇らしげな表情で話す。

ジャンプとクロスカントリーの両方の競技で競う、ノルディックコンバインド。冬季五輪では第1回大会から実施され、日本も28年サンモリッツ大会から出場している。本場ヨーロッパでは優勝者は「キング・オブ・スキー」と称えられる競技だ。日本人で萩原健司が92～93年シーズンに初めてW杯総合優勝獲得してから3連覇を果たしているが、渡部の初制覇はそれ以来23シーズンぶりの快挙だった。

しかも、当時は競技性も違っている中のタイトル獲得は価値があるものだ。荻原の頃はV字ジャンプが始めた時期で各選手の技術差も大きく、ジャンプで大量リードを奪つて勝つパターンだった。V字ジャンプの習



OLYMPUS

機動力 撮影領域を広げる
ミラーレスシステム
BREAK FREE

どんな環境下でも高画質を提供する プロフェッショナルモデル

- 縦位置グリップ一体構造、防塵防滴・耐低温(-10°C)の小型軽量システム
- 121点オールクロスセンサーとインテリジェント被写体認識AFにより高い追従性を実現する高速、高精度AF
- 20 M Live MOS センサー&ダブル画像処理エンジンと最高7.5段^{※1}の補正を実現する5軸シンクロ手ぶれ補正が実現する高画質
- 三脚&手持ちハイレゾショットによる50Mの超高精細画像^{※2}を実現
- ライブND、ライブコンポジット、深度合成など創造性に応える充実の機能
- 4K /シネマ4Kが持ちで撮影できるOM-D MOVIE

*1 使用レンズ: M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO 焦点距離 f=100mm(35mm判換算200mm相当)、半押し手ぶれ補正 OFF、フレームレート: 高速、CIPA 規格準拠 2 軸加振時 (Yaw/Pitch) *2 撮影中に被写体が動いた部分の解像が低下する場合があります。



OM-D
E-M1X

オリンパス株式会社

オリンパスプラザ東京

〒160-0023
東京都新宿区西新宿1-24-1
エスティック情報ビル B1F
Tel:03-5909-0190

オリンパスプラザ大阪

〒550-0011
大阪市西区阿波座1-6-1
MID西本町ビル1F
Tel:06-6535-7911

オリンパスプラザ大阪

四ツ橋線/中央線/御堂筋線 本町駅
至梅田
中央大通り 本町駅 ● 23番出口 四ツ橋筋
なにわ筋
JR新宿駅
都府方面 新宿三井ビル 新宿センタービル
中央通り(地下通路)
工学院大学
京王プラザホテル
オリンパスプラザ東京
エスティック情報ビルB1F
MID西本町ビル
● 本町駅
22番出口
オリンパスプラザ大阪
MID西本町ビル

5 ATHLETES



八村塁
RUI HACHIMURA

フェアリー ジャパン POLA
FAIRY JAPAN POLA

西田有志
YUJI NISHIDA

鈴木雄介
YUSUKE SUZUKI

国枝慎吾
SHINGO KUNIEDA

待ちに待ったオリンピック・パラリンピックイヤーの到来。
憧れの大舞台でメダルを掲げることを目指し、
多くのアスリートが力強く歩みを進める中、
注目のアスリートたちの“今”を追った。



「二〇二〇」は
未来に何を
生み出すのか。



©Yukihito Taguchi

NBAで日々進化 八村塁 RUI HACHIMURA

日本人として初となるNBAドラフト一巡目でワシントン・ウィザーズに入団した八村塁。日本人がドラフト一巡目、しかも9位という高い順位で指名され、そして活躍する未来を誰が思い描いていただろうか。

22歳、203cm。恵まれた体躯を生かして得意のポストプレーのみならず、誰よりも率先して前を走り、豪快なダンクをぶちかます。特にミドルレンジのシュートはNBAでも代名詞となるほど確率の高さを持つ。

八村の凄さは記録にも現れています。2019年10月末にNBAのルーキーイヤーが開幕して以降、出場した25試合すべてに先発を務め、アベレージは29.2分出場、13.9得点、5.8リバウンドと、予想以上のスタッツを残している。10月24日のデビュー戦ではいきなり19得点、10リバウンドのダブルダブル（※）をマークして周囲を驚かせた。

昨季NBAファイナルでMVPを受賞したカワイ・レナード率いるロサンゼルス・クリッパーズと対戦したときは、自己最多となる30得点、9リバウンドをマーク。課題とされていた3ポイントも迷いなく打つようになり、ゴンザガ時代に73.9%だったフリースローはフォームを改善し、現在は83.3%まで上昇しているように課題を次々に克服している。

もちろん、NBAの怪物たちから洗礼を浴びる日もある。ウィザーズではゴンザガ時代のように八村にボールが集まらず、自分がファーストオプションにならない展開も多い。それでも、悪いプレーを露呈した後には必ず改善が見られ、無理なシュートに持ち込まれないようにスペーシングとフロアバランスの取り方に気を配っているのがわかる。こうした高い適応力に対し、ウィザーズのヘッドコーチであるスコット・ブルックスは「塁は何年もやっているベテランのようだ」と褒めちぎるほどだ。

ただ、八村は今、この原稿を書いている1月末時点での試練の真っただ中にいる。12月16日に太ももの付け根あたりの鼠径（そけい）部を負傷してしまい、その後は欠場に至っているのだ。当初は軽めの負傷だと予想されていたが、手術にまで至ったことで回復が長引いている。

八村の良さはプレーの質の高さもさることながら、これまで怪我とは無縁な丈夫さにあった。明成高（宮城）で八村を指導した佐藤久夫コーチと高橋陽介アスレティック・トレーナーは、預かった逸材に対して怪我をしにくく強い体に鍛えてアメリカへと送ったのだ。

試合ごとに適応している姿を見ればわかるが、八村は身体能力がありながらも能力で押しきってプレーするタイプではない。目の前

のやるべきことをコツコツと積み上げて得点を重ねるタイプ。これは高校時代の教えが習慣として体に染みついているものだ。

高校に入学した当時の八村は気持ちとプレーにムラがある選手だった。「アメリカの荒波の中で自分を表現して生きていけるように」と、常にハードワークを課して厳しく鍛えたのが佐藤久夫コーチだ。その教えがNCAAの強豪ゴンザガ大で開花。フィジカルモンスターが集う中でも力が發揮できるようにと体の使い方を学び、語学力を身につけたことで仲間とコミュニケーションが図れるようになった。こうして、努力に加えて持ち前の才能が開花してNBAに到達したのが八村塁なのである。

明成高の佐藤久夫も、ゴンザガの大マーク・フューも、ウィザーズで八村の育成を担当するデビッド・アドキンスも、八村を指導するコーチたちは皆が口を揃えて言う。「塁はまだまだ伸びる」と。

さらに成長するためには、20代前半のうちにいかに試合で経験を積めるかだろう。そのためにも、今はまずは負傷の回復に務め、復帰した際にはこれまで走れなかつた分も暴れてほしい。

2020年、試合を乗り越えた八村は一皮むけてくれるに違いない。八村の行く先は日本のバスケ界を照らす。

文／小永吉陽子

※ダブルダブル＝1試合で得点、アシスト、リバウンド、ブロックショット、スティールの主要5部門において、2部門で2桁の記録を残すこと。





©Rimako Takeuchi



©Rimako Takeuchi

フェアリー ジャパン POLA

FAIRY JAPAN POLA

金メダルか予選落ちか

新体操ナショナル選抜団体チーム(フェアリー ジャパン POLA)は、2019世界新体操選手権バクー大会において、44年ぶりの団体総合銀メダルを獲得。また、種目別決勝でもフープ＆クラブで銀メダル、ボールでは団体史上初となる金メダルを獲得した。今回は、すべてのカテゴリーでメダルを獲得できたが、その転機となったのは2019年6月にタイで行われたアジア選手権であった。

団体総合では優勝できたものの、種目別ボールではウズベキスタンに大差をつけられて敗北。明らかに難度点の差であった。観客席で

ウズベキスタンの演技を観ていた日本新体操関係者は「このままで世界選手権で勝つことは絶対に無理」と、スコアボードの表示に驚愕した。そこで青天井になった難度点設定の読みが浅かったことを反省し、とことん難度点を上げるべく、これでもかと構成に連係を増やした。各連係の価値点を上げるために、視野外(0.1加点)や手以外(0.1加点)のキャッチや複数投げ(0.2加点)などにも果敢に挑戦して、たった1か月ほどで4点近く上げた。が、作品に難度点を盛り込んでも、それを実施しなければ意味がない。選手たちはブ

レッシャーをはねのけて0.1の獲得にこだわった練習をし、と同時に美しさやシンクロ性などのクオリティを下げずに、実施点での0.1の減点を減少させることにもチャレンジしたのである。結果、複数のメダルを獲得できたが、これまで世界選手権では4大会連続でメダルを獲得できたことで、ロシア、イタリア、ブルガリアの“三強”との差もほぼなくなったと言える。「オリンピックでのメダル獲得」を目標に活動し始めてからはや15年。今では「メダル獲得が目標です」と口にしても、誰もバカげたこととは思わないだろう。それ

どころか、メダルは確実と思われている向きもある。しかし、現実はそれほど甘くない。東京オリンピックに向けて日本は2019年の世界選手権より数段難しい作品に挑んでいるが、どの国もより一層の難度点アップに努めるであろうし、これまで以上のし烈な戦いが予想される。よって日本がメダルを獲得する可能性を問われれば、「五分五分」。種目別で日本に王座を明け渡したロシア、ミスに泣いたイタリア、ミスなく演技しながら日本に勝てなかったブルガリア、そしてペラルーシ、ウクライナなど、どこの国にも金メダルのチャンスはある。逆に、リスキーな作品である分、どこの国も予選落ちを余儀なくされる可能性も十分にある。

「金メダルか予選落ちか」まさに崖っぷちの戦いである。が、本当の戦いは「オリンピック本番ではなく、日々の練習にある」。どれだけ0.1の得点を獲得することにこだわれるか。どれだけ0.1の減点をなくすことにこだわるか。そんな日々を積み重ねていくことしか、オリンピックのメダルには近づけないのである。

文／山崎浩子



©Kiyoshi Sakamoto



©Kiyoshi Sakamoto

西田有志
YUJI NISHIDA

曝け出す闘争心

令和の怪物——。

手垢のついた常套句も、枕言葉を変えるだけで新鮮味を帯びてくれる。間違いなく、この一年で躍進を遂げた若きアスリートの一人だ。

西田有志、二十歳。

物語の始まりは、2年前に遡る。2018年1月6日の堺戦でVリーグデビュー。高校在学中の17歳だった。第1セットの終盤に途中出場すると、2本連続でスパイクを決めた。トータルで15本のスパイクを放って10得点。チームはストレートで敗れたものの、会場の視線を独り占めにした。

先発した翌日のJT戦は、スパイクだけでチーム最多の22得点。フルセットにもつれ込んだ一戦でフル出場し、それ以降、オポジットの定位置を確保している。

その年の4月、中垣内祐一監督が率いる日本代表に召集された。あどけなさの残る顔に「華」が加わった。勝負師の顔になったのだ。象徴的だったのが、2019年のワールドカップである。

エースの石川祐希に伍す活躍を見せた。圧巻は、最終カナダ戦。第5セット、9-9でサーブが回ってくると、豪快に左腕を振り抜

いた。5本のサービスエースを決め、一気に試合を締めくくった。

目標に掲げていたメダルは獲得できなかったが、日本史上初の8勝を挙げて4位と躍進。大会のベストサーバーにも選ばれ、2020年の東京オリンピックに向けて弾みをつけた。

取り巻く環境は大きく変わった。ホームゲームのチケットは完売。西田がコートに立つだけで黄色い声援が飛んだ。ウォーミングアップでスパイクを打てば、それだけでどよめきが走る。背番号の「14」が入ったオフィシャルグッズは飛びように売れた。

しかし、西田にプレはない。身長186センチは、攻撃専門のオポジットの中では小兵に入る。それを補って余りあるジャンプ力とパワー。コースを打ち分けるテクニックに優れ、得点を量産してきた。

好不調の波もなくなり、今シーズンは常に高いパフォーマンスを發揮。スパイクを決めた後のド派手なガッツポーズで、多くのファンを魅了している。

芯が強く、プレイヤーとしての青写真をしっかり描いているのも、将来性を感じさせる要因だ。

「(昨年の)ワールドカップはすべての試合でダメなところがありました。日本代表の(プラン・)フィリップコーチからも、『世界的なプレーヤーになるなら、コースに打ち分けたり考える力を身につける』と言われています。特に相手のブロックが揃っているなど状況が悪い時は、ブロックアウトやリバウンドを取って攻撃のバリエーションを増やさなければいけません。どこが相手でも、プレーの質を高めもっと自分を追い込んでいきます」

年内のVリーグを15勝1敗の2位で折り返した。スパイク、サーブでは、並み居る外国人選手を抑えて上位をキープ。快進撃を続けるジェイテクトSTINGS(ステイングス)の中心として存在感を示している。

7月25日、東京オリンピックの男子予選ラウンドがスタートする。果たしてその時をどんな気持ちで迎えるのか。

閉じ込めておけない闘争心を曝け出すか。心の炎はメラメラと燃え盛っているか——。

文/岩本勝曉



©Hidetoshi Nakano



©Hidetoshi Nakano

自分のためではなく

鈴木雄介 YUSUKE SUZUKI

2019年、陸上界の顔となったのは31歳の競歩選手、鈴木雄介(富士通)だった。

4月に50km競歩の日本新マークし、8月にドーハで行われた世界陸上では高温多湿の中、4時間余を歩ききり金メダルを獲得。競歩種目の五輪&世界陸上での金メダルは日本人初で、12月に開催された日本陸上競技連盟主催のアスレティック・アワードで、アスリート・オブ・ザ・イヤーに選ばれた。

受賞後のスピーチが印象的だった。「私は2011年に初めてアワードに出席しましたが、その年はテグ世界陸上ハンマー投で金メダルの室伏広治さんが受賞されました。室伏さんの登壇する姿やスピーチされる様子を、本当にうらやまし

いと思いながら見ていたことを覚えています。その後、私にもチャンスがありました。福士加代子さん(13年世界陸上女子マラソン銅メダル)、右代啓祐さん(14年アジア大会十種競技金メダル)、谷井孝行さん(15年世界陸上50km競歩銅メダル)といった先輩の方々が、私の受賞を阻み続けました。本当に悔しかったです」

鈴木は2011年のテグ世界陸上では20km競歩で8位に入賞した(後にドーピング失格者が出て4位に繰り上がった)。

12年ロンドン五輪は故障明けで36位に終わったが、13年、14年とシーズン世界最高記録=日本新を連発。そして15年3月には1時間16分36秒の世界新記録を樹立した。しかし13年世界陸上

と14年アジア大会では自身の設定した目標に届かず、15年8月の北京世界陸上は故障で途中棄権に終わった。

北京世界陸上1カ月前には、次のように意気込んでいた。「目標はもちろん金メダルです。来年のリオ五輪、再来年のロンドン世界陸上と世界大会が3年続きますが、全て金メダルを取ります」。

今になって思えば、その頃の鈴木には“余裕”がなかった。周囲を寄せ付けないような集中の仕方で金メダルしか見ていなかった。

鈴木は、自身の身体が示していた変調のサインを押し切って練習し、恥骨周辺の痛みで北京世界陸上を歩ききることができなかった。

その代償は大きく、18年5月まで3年弱、試合に出られない

日々が続いた。19年、その鈴木が復帰わずか11カ月で、種目を50km競歩に変更して日本新を出し、1年3カ月で金メダルの快挙を達成した。

それを可能にした要因は大きく2つある。1つはフォームの進化である。

長期間のリハビリトレーニングを経て、「ブレが少ない歩き方」ができるようになった。「以前のような爆発力はないが、効率良く、故障をしにくいつорм」に変えられた。地面に加える力は小さくなつたが、本来の特徴である「蹴る動作よりも重心移動」をより重視した動きである。距離の長い50km競歩に適した動きともいえる。

もう1つは気持ちの“余裕”だ。
「(2年半は)本当に真っ暗闇で

したが、支援してくださる方が『ここだよ』と、かすかな光を照らしてくれて、復帰することができました。今はその方々の顔を思い浮かべながらレースをすることができる。自分のためのメダルではなく、応援してくださる方々のメダルだと思って歩くことがあります」

競技をできることへの感謝の気持ちが、余裕につながっている。もちろん復帰後も目標は金メダルで、厳しい練習も行っている。だが自身を冷静に見つめることで、やり過ぎの練習はしなくなった。例え調子が悪くても、短期間で上向かせることができる。気持ちに余裕があれば、調整でミスすることもなくなる。

ドーハ世界陸上も金メダルが目

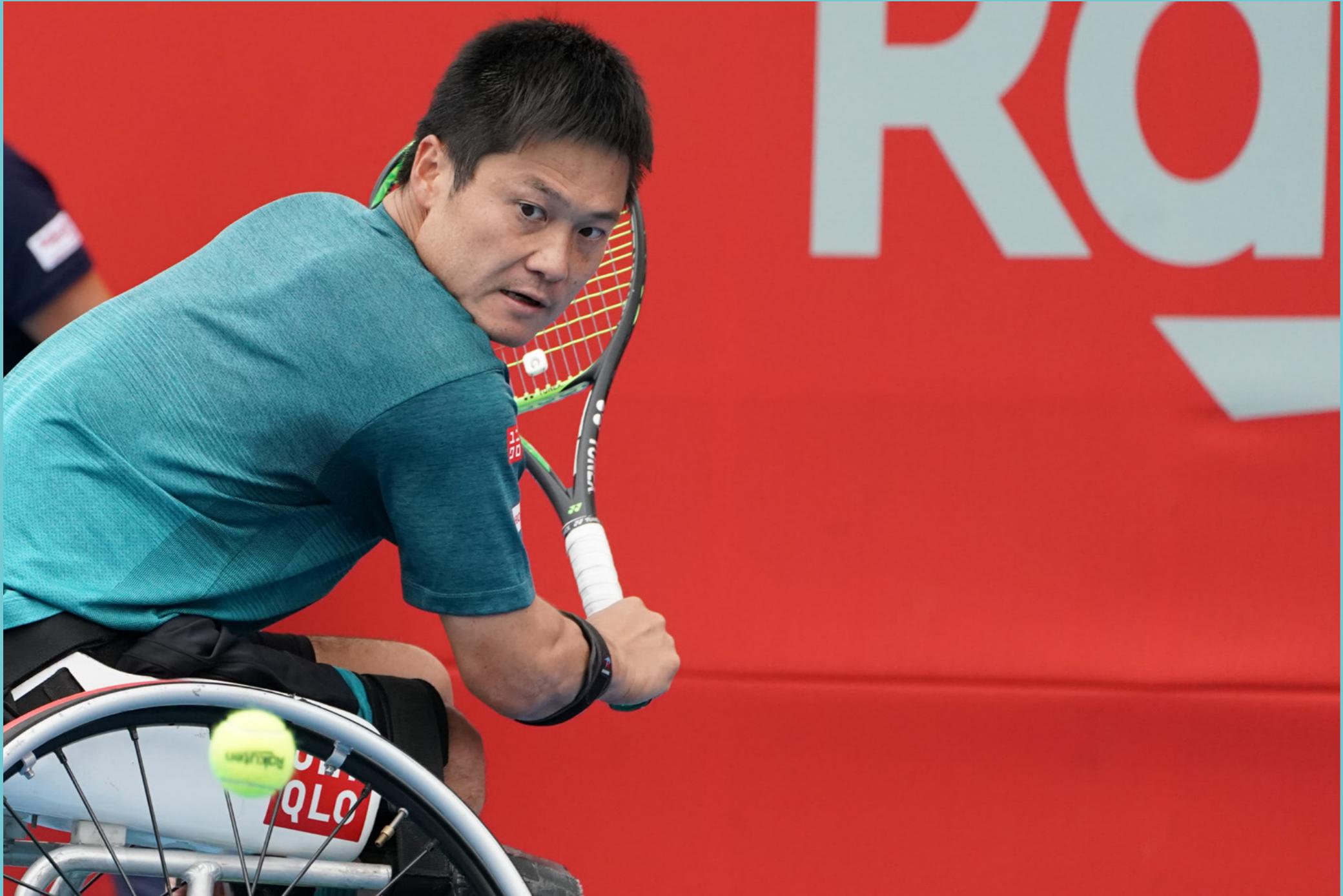
標だったが「日本の誰かがメダルをとれば、それが自分でなくてもいい」と言って日本を出発した。ドーハに着くと、想定以上の熱さと湿度に「メダルよりも、この気象条件の中で歩ききること」に集中した。自身の体調を顧みなかつた北京世界陸上の時とは、まったく違う鈴木がいた。

アスリート・オブ・ザ・イヤー受賞時のスピーチは「私はこの賞をもらえるように努力し続けて、今後も(後輩選手)皆さん壁となります」と締めくくった。

これは東京五輪でも金メダルを取ると宣言したことになる。鈴木の強気は、20年の今も健在だ。

だが、その強気のコメントは、アワードの会場を温かい雰囲気に包んでいた。

文/寺田辰朗



©Moto Yoshimura

最前線への回帰

国枝慎吾
SHINGO KUNIEDA

国枝慎吾にとって、リオパラリンピックが開催された2016年は、敗北のシーズンだった。1月の全豪オープンで、国枝はイギリスの選手に1回戦負けを喫した。右肘が悲鳴をあげ4月に手術を受ける。

9月に行われたリオパラリンピックでは、ダブルスでは銅メダルを獲得したものの、シングルスは準々決勝で敗退した。

国枝のキャリアは輝かしい。2004年アテネパラリンピックのダブルスで金メダルを獲得し、06年に初めて世界ランキング1位に。08年北京、12年ロンドンパラリンピックでのシングルス2連覇。09年から車いすテニスのグラン

ドスラムが一般の大大会と同じ場所・時期に開催されるようになり、国枝はシングルスで26勝、年間グランドスラム5回という、驚異的な数字を叩き出している。

車いすテニスでは、バックハンドのトップスピンは不可能だと言われていた。それをひっくり返したのが国枝だ。世界のライバルたちは、国枝の背中を必死に追いかけ、その過程で、一般的のテニスのセオリーを取り入れるようになった。国枝のように、不可能を可能にすべく。そうしてイギリスの選手たちは、車いすに座った状態で高い位置から鋭い弾道のバックハンドを身につけた。2016年に国

枝が敗北した背景には、右肘の故障だけでなく、世界の車いすテニスの進化があったのだ。

リオパラリンピック後、半年間の休養を経て復帰した。「2017年は、正直なところ、世界の潮流をどう追いかけるかがテーマだった。最初は、真似から入って、そこからオリジナルへと昇華させていく。技術の先回りをすることで、勝利を生んでいくのだと思う」

との言葉通り、イギリスの選手たちのプレーを真似るところからリスタートし、己のプレーを確立させる。国枝が、新たなバックハンドを身につけて、グランドスラム

ムの舞台に戻ってきた。進化が、再び国枝を軸に回り始めた。

2019年は、新しい風が吹いた。9月30日～10月6日に開催された楽天オープンに車いすテニスの部が初めて設けられ、国枝は単複の初代チャンピオンとなった。この大会に出場していたノバク・ジョコビッチは、過去に車いすに乗つて国枝とテニスをした経験がある。「車いすテニスの選手たちは、真的ヒーロー。彼らは自分たちの障害をアドバンテージに変えてプレーし、我々に勇気を与えているのだから」(ジョコビッチ)

グランドスラムだけでなくATPツアーでも車いすテニスが

同時開催されることは、国枝の長年の夢だった。それが一つ、実現した。

また、10月14日には国枝がアンバサダーを務めるユニクロのチャリティイベントが東京・有明コロシアムで開催。イベントマッチとして国枝とロジャー・フェデラーがペアとなってダブルスが行われ、満場のスタンドを魅了した。

「2003年のウインブルトンで優勝した姿を見たときから、僕はフェデラー選手の大ファンだった。その憧れの選手とダブルスを組めたなんて夢のよう。控え室に戻つてから、これで引退してもいい、と思うくらいの感動だった」と、

国枝が手放しで喜んでいたが、感動は国枝だけのものではない。

「国枝とプレーできたのも、ユニクロのイベントだからこそ。私にとっても素晴らしい体験だったが、それはそのまま観客にとっても同じように素晴らしい体験だった。そしてこの経験が、2020年東京五輪・パラリンピックに繋がっていくはずだ」

と、フェデラーが語った。東京五輪・パラリンピックの舞台に、スイス代表としてフェデラーが、日本代表として国枝が立つ。2020年、興奮の夏が、まもなく幕を開ける。

文/宮崎恵理



©Moto Yoshimura

Interview
Yoshitaka Nakatani

Amazing
56 years from 1964

中谷吉隆AJPS初代会長に聞く



©Miki Sano

1977年の日本スポーツプレス協会(AJPS)設立から43年が過ぎた。
設立当初はフォトグラファーのみ13人という会員の構成だったAJPSだが
92年に国際スポーツプレス協会(AIPS)に加盟し
ノンフィクションライターの佐瀬稔氏が会員に加わったをきっかけにライター会員が増え
今では約172人の会員全体の3割以上を占めるまでになっている。
初代のAJPS会長である中谷吉隆・名誉会員を訪ね
AJPS発足時のこと、AIPS加盟の苦労
さらには自身にとって二度目となる東京オリンピック・パラリンピックへの思いを取材した。

市ヶ谷にある中谷氏の事務所を訪ねると、壁一面に広がる書棚が「ようこそ」と言うよう招き入れてくれた。本や資料という姿で、日本スポーツ界の歴史が鎮座していた。日本スポーツプレス協会生みの親のひとりである中谷氏に、まずはスポーツ報道に携つた経緯を聞いた。

中谷氏は1937（昭和12）年、広島で生まれた。東京写真短期大学（現東京工芸大学）を出て57（昭和32）年に東京新聞社の嘱託社員として契約。新聞の仕事をしながら主に『週刊東京』という週刊誌の写真スタッフとしての日々が始まった。

最初の頃は暗室ばかりやらされた。当時のカメラは一眼レフの前の、スピードグラフイック（通称「スピグラ」）。江利チエミと高倉健の結婚を撮りに行くなど、芸能の仕事が多かつた。上司からいきなり『山へ行つてこい』と言われ、谷川岳で撮つたこともある。このような状況から始まつた写真家生活だが、中谷氏にはやりたいテーマがあった。そこで新聞社を辞めたのが60年。「60年安保」の年である。

自分がやりたいのは社会的なテーマ。人間の生きざまを写真で表現したい

自分が中国・天津からの引き揚げ者という生

1964—2020
が語る56年
文／矢内由美子
社会派スポーツカメラマン



SWATCH FIVB WORLD TOUR 2010 GSTAAD ©Ryutaro Makino

Nikon

Zでなければ、
会えなかった自分がいる。

ニコン史上最高画質
フルサイズミラーレス

Z7 Z6 オールラウンド
フルサイズミラーレス

CAPTURE TOMORROW

ニコンカスタマーサポートセンター
0570-02-8000

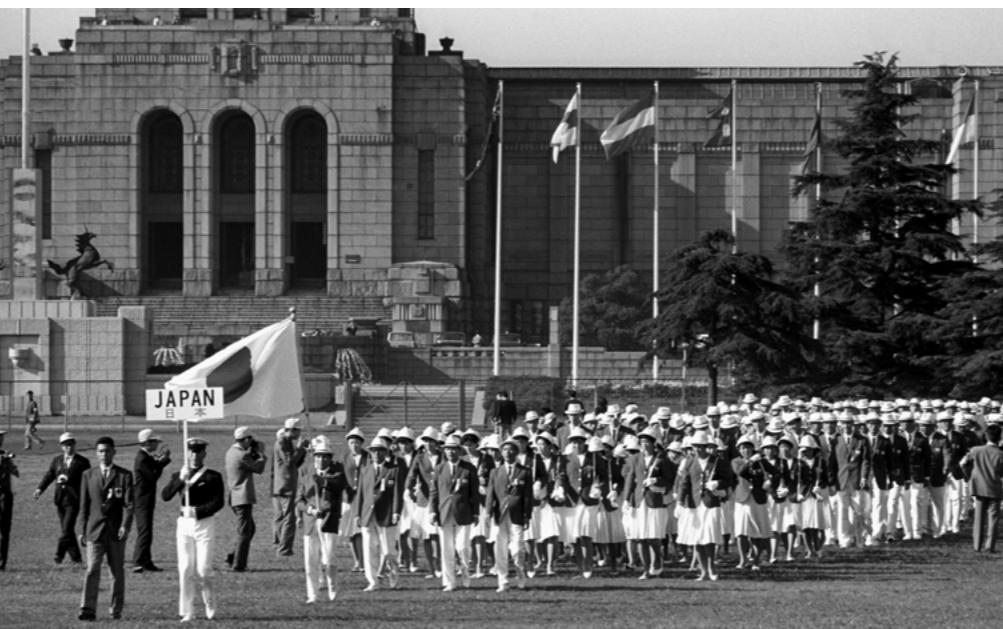
一般電話からは市内通話料金ご利用いただけます。営業時間9:30~18:00（日曜日、年末年始、夏期休業等を除く毎日）●ナビダイヤルご利用いただけない場合は、(03) 6702-0577におかけください。●ファクシミリでのご相談は、(03) 5977-7499へご送信ください。

www.nikon-image.com | 株式会社ニコン・株式会社ニコンイメージングジャパン

1.1億本
NIKKOR



選手村でくつろぐ選手たち ©Yoshitaka Nakatani



入場行進に向かう選手団 ©Yoshitaka Nakatani



男子マラソン優勝者、アベベ・ビキラ ©Yoshitaka Nakatani

Amazing 56 years from 1964

い立ちがある。天津の小学校から、原爆を投下された広島に引き揚げてきたのが46（昭和21）年。人間が必死に生きるところにあるダイナミズムのつぶである。そして、国会前で撮影するカメラマンの多くがフリー・ランスだった。東京新聞を辞めたとたんに他の新聞社から声がかかったがすべて断り、中谷氏もフリーとして独立した。

発表媒体としては『週刊朝日』『アサヒグラフ』『サンデー毎日』『週刊文春』『週刊新潮』などの勢いのすごかつた週刊誌のグラビアでテーマ物をやりたいという気持ちになり、24歳だった61（昭和36）年にトカラ列島へ行った。鹿児島と奄美大島の間に離島が北斗七星みたいに並んでいる所である。ここは戦後、米軍に接收されていたが51（昭和26）年に返還された島々だった。日本政府の離島振興策を受けている最中の島民たちが、実際にどうなっているのかを半年間かけて撮りに行った。

同じ頃、日本政府はボリビア、ドミニカと移住協定を結んでおり、トカラ列島撮影の後は南米に船で渡り、撮影した。日本政府の甘言と現地での暮らしがあまりにかけ離れていたため、夢破れて帰つてくる人々が続出していたからだ。

「戦後の移民って一体何なのだ。これはどこに問題があるのだろう」

週刊誌から原稿料を前借りしてチリからペルー、ボリビア、ドミニカへ行き、帰つてきたのが63（昭和38）年。64年7月の週刊朝日に「地の果てを開く」という題名で11ページのグラビアが掲載された。富士フォトサロンで展覧会も開いた。

折しも、東京オリンピックを目前に控えた



中谷吉隆（なかよしよしたか）
1937年広島生まれ 東京写真短期大学卒業後
東京新聞社の嘱託カメラマンとなり社会派フォトジャーナリストとして
数々のルポルタージュをグラフ誌に掲載。
1977年からAJPS代表を勤める。現在は俳号
「龍子」を名乗る写真俳句の第一人者でもある。

「ツプレス協会（AIPS = Association Internationale de la Presse Sportive）」との関係性をいくつも必要性と、その方法である。世界選手権などのビッグイベントを取材するためには、AIPSの資格を得る必要があるからだ。

「日本スポーツプレス協会」をフランス語の「Association Japonaise de la Presse Sportive」としたのは、設立当初からAIPS加盟を意識したものだった。また、AIPSはカメラマンの団体ではなく、「スポーツジャーナリスト」の団体である。とあらば、スポーツライターを含めるということにしておかないAIPSには加盟できない。

AIPSが設立当初に掲げた理念として、「本会はスポーツジャーナリストと呼べる人間立、擁護し、表現及び報道の自由の確保に努め、もつて日本のスポーツ界の健全な発展に寄与することを目的としている」と記しているのはそのためだった。とはいえ、日本にフリーランスには加盟できない。

「本会はスポーツジャーナリストと呼べる人間立、擁護し、表現及び報道の自由の確保に努め、もつて日本のスポーツ界の健全な発展に寄与することを目的としている」と記しているのはそのためだった。とはいっても、日本にフリーランスには加盟できない。

その状況に変化が出てきたのが、80（昭和

55）年に創刊された『Number』に山際淳司氏が発表した『江戸の21球』である。79

年の日本シリーズで、広島カープが近鉄バファローズに勝つて日本一になった試合のインサイドストーリーである。

AIPSの発足と交渉が次第に実を結び、競技団体が取材許可を出してくれるようになってきたことと、日本国内にスポーツ報道の確かな芽が出てきたのと同じ頃 中谷氏らは

どうどうAIPSへの加盟申請をスタートさせた。85（昭和60）年のことだ。

すると、すでに新聞各社でつくっていた日本運動記者クラブからクレームがついた。

「それはできない」と言うのである。

しかし、AIPSの規約を熟読していた中谷氏は「受け皿となる団体があれば加盟することができる」という規約の文言を武器に、

それをアーチャー射箭の矢のように放つた。

その後も共同通信運動部長との折衝は続いた。AIPSの事務局長であるペラゴラ氏や

アーチャー射箭の矢のように放つた。中谷氏は、AIPSに加盟したことと、ラ

イター会員を加入させていく下地をつくったこと、また賛助会員制度のベースをつくって財政の安定を確立した92年を区切りとして、会長を勇退した。

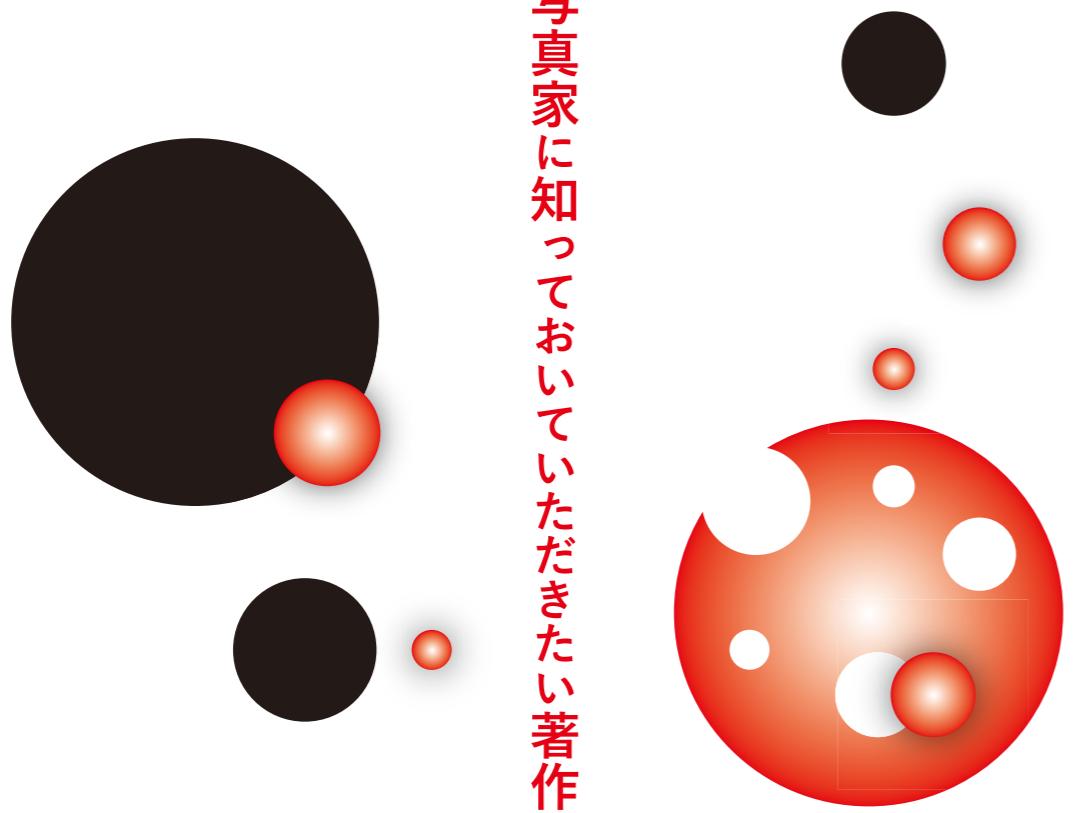
2020年、中谷氏は東京オリンピックを撮影することにしている。パラリンピックは64年にも「国際身体障害者スポーツ大会（第13回国際ストーカー・マンデビル競技大会）」という名称で、オリンピックが終わってからの11月8日から12日まで、織田フィールドで行われたが、報道されたのはごくわずか。写真もあまり残っていない。56年前にオリンピックを撮った者として、今度はパラリンピックで心を震わせる試合や選手を振りたいといふ思いがあるのだ。

「自分の心に感じる瞬間を、試合から、選手

から切り取りたいという思いが根底にある。それが僕のスポーツ写真。人間が生きるといふことは何なのかというところに返っていく

アベベの走りから感じた「哲学」を、今までいくのだろうか。





写真家に知つておいていただきたい著作権のこと

あなたが写真を撮った瞬間に、
写真の著作権はあなたの**財産**となります。
そのために何の**登録**も必要としません。

あなたの写真は、著作権というとても**強い権利**で、
あなたの**死後70年**に渡って守られます。
しかし、著作権を譲渡する契約が交わされた写真は、
その**権利を失い**、回復することは**困難**です。

写真家はできる限り、
「写真の著作権を**保持するべき**である」
と私たちは考えます。

写真著作権を大切に



一般社団法人
日本写真著作権協会

<https://jcpa.gr.jp> 〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCII ビル 403

[正会員団体] 公益社団法人日本写真家協会/公益社団法人日本広告写真家協会/一般社団法人日本写真文化協会/日本肖像写真家協会/一般社団法人日本写真作家協会/全日本写真連盟
一般社団法人日本スポーツプレス協会/一般社団法人日本自然科学写真協会/日本風景写真協会/公益社団法人日本写真協会/一般社団法人日本スポーツ写真協会

この広告は、公益社団法人日本複製権センターからの分配金による公益事業の一環として制作されています。



FAIRY JAPAN
POLA

新体操日本代表を、ポーラは応援しています。



R
O
A
D
T
O
K
Y
O
2
0
2



【AJPS MAGAZINE vol.37】



清水邦広



福澤達哉 石川祐希

いや、まだその表現は早い。
復活。
確かに、ここまで戦えるとは思わなかつた。
快進撃。

文／田中タ子
写真／平野敬久

2008年の北京五輪以後、2大会五輪出場を逃がし、14年には世界選手権出場を逃した。低迷の時代、とか、暗黒の時代、とか。日本の男子バレーボールを語られる時、定型文のように同じことを聞かれ続けた。

「どうせ、男子は勝てないんでしょう」と。

世界の勢力図を見れば、女子よりも男子のほうが圧倒的に世界で勝つのは難しいのは確かだ。何しろ相手は上背で勝り、力で勝り、技や経験で勝る。いつまでも過去の栄光をひけらかし、「細かい技術は日本が上だ」と根拠のない主張を論じる時代はとっくに終わった。だが今、日本の男子バレーボールは、そんな底から、這い上がつて来た。

16年のリオ五輪を逃がした翌年、中垣内祐一監督が指揮を執り、新たな日本代表がスタート。長年の低迷で失いかけていた「自信」と「知識」を与えたのがコーチに就任したフ

ィリップ・プランだ。かつてフランス代表として現役時代をプレー、その後欧洲各国のクラブチームで指揮を執り、母国フランスの監督を務め、ボーランド代表でコーチを務めた14年には世界選手権を制した。

凝り固まつた伝統や経験ではなく、今、世界はどうのように戦っているのか。広いビジョングで未来を語るプランの戦略が、勝つことに飢えていた日本選手にピタリとハマる。17年のワールドグランプリヤンピオンズカップ、18年の世界選手権は芳しい結果を残せず終わつたが、それでも悲観する要素は一切なかつた。決して楽観ではなく、今何をすべきとして戦っているのか。その「形」が明確で、間違いないなくチャレンジの過程にあることが見える。

16年のリオ五輪を逃がした翌年、中垣内祐一監督が指揮を執り、新たな日本代表がスタート。長年の低迷で失いかけていた「自信」と「知識」を与えたのがコーチに就任したフ

ったのが19年のワールドカップだった。

本代表を牽引する。そしてその背を追い、世界という広い舞台で急成長を遂げたのが19歳のオボジット、西田有志だ。サウスポーから放つ強烈なスパイクと、世界ナンバーワンの称号を得たサーブ。したのが石川祐希。中大1年時の14年に日本代表に選出され、在学中からイタリアセリエAでプレーし、卒業後は大半がそうであるように日本のVリーグへ進むのではなく、石川はプロ選手としてイタリアへ渡つた。

もともと攻撃力に定評はあったが、その能

力の高さゆえ、身体に負荷がかかり、大学在学中はケガも続ぎ、満足なシーズンを過ごせることができなかった。だがプロ選手となり、生

ることにならなかった。だがプロ選手となり、生じる責任はすべて自分に降りかかる。あえて厳しい環境に身を置くことに加え、これまで

ロンドン五輪で銅メダルを獲得するなど女

子バレーが光の中で取り上げられればされる

帰を果たし、3年ぶりに日本代表に選出された清水邦広と共に、北京五輪に出場した。

で支えたのが福澤達哉。右膝の大けがから復元となり、重ねる勝ち星の数だけ強くなる。

光つたのは眩い若さだけではない。

美しく上昇する成長曲線を、目立たぬ場所で支えたのが福澤達哉。右膝の大けがから復元となり、重ねる勝ち星の数だけ強くなる。

敗ればはしたが「あのブラジルに勝てるかもしれない」と確かな期待を抱けるほど、日本の男子バレーが高揚感が戻つて来た。

そして結果は12チーム中4位。五輪予選の合間に主力を欠くチームも多かつたとはいえ、近年と比べれば内容も伴う好成績だ、と見る

男子バレーが高揚感が戻つて来た。

男子バレーが高揚感が戻つて来た。

悔しさしかありません。

復活、と言うのはまだ早い。

目標す場所は、もっと先。まだまだ、日本

男子バレーは強くなる。決して期待で

見出しう、自らの果たすべき役割を見つけた。

も、願望でもなく、そう信じている。

夢を
現実のものに
するまで

写真・文 加藤誠夫

13年振りに自力で勝ち取ったワールドカップでの戦いは、全ての試合が決して悪い内容ではなかった。しかし、チームの爆発力に何かが足かせとなり、選手一人ひとりのボタンシャルを發揮できない空気感がベンチを取り巻くなか、最後まで一休きを生み出すことなく「勝利」が遠のいていった。

中国広東省東莞バスケットボールセンター、5戦0勝5敗。世界と日本の間に厳然と存在する戦略・フィジカルの違いを現実に見せつけられた中国ワールドカップだった。

2020年オリンピックイヤーを迎え、世界スタンダードで戦うことが求められていく。AKATSUKI FIVEにとっての自国開催オリンピックは最大の挑戦・目標である。勝利のため、さらなる成長のため、決して時間は止まらない。



八村 墓



AKATSUKI FIVE



渡邊雄太



馬場雄大



フリオ・ラマス



比江島慎



ニック・ファジーカス

渋野日向子の 2019年

写真／戸村功臣
文／編集部



第50回デサントレディース東海クラシック 優勝



第38回大王製紙エリエールレディスオープン 優勝



資生堂アネッサレディスオープン 優勝



ワールドレディスチャンピオンシップ 優勝



北海道 meiji カップ 13位タイ

女子ゴルフ界の序列が一目でわかる、ロレックスランキング（世界ランキング）が注目される年が始まった。東京オリンピックの出場権は、6月29日までと、条件を満たした5大陸の代表者に与えられる。今年前半はトーナメントの結果は

2020年1月27日現在、ランキングで11位につける渋野だが、昨年1月のランキングでの同ランキング上位60名（一カ国最大4名）は2・83ポイントで564位だった。19年、5月のLPGAツアー初優勝を皮切りに、夏までに2勝。賞金ランキング3位で

もちろんのこと、各選手の獲得ポイントに一喜一憂する期間になりそうだ。2020年1月27日現在、ランキングで11位の渋野だが、昨年1月のランキングで218・9まで大きくアップさせた。564位から11位にジャンプアップ。19年、5月のLPGAツアー初優勝を皮切りに、夏までに2勝。賞金ランキング3位で

出場権を得た8月の全英女子オープンでは、初海外がメジャー大会で初優勝という快挙を成し遂げ、帰国後更に2勝をあげて年末時点のポイントを218・9まで大きくアップさせた。564位から11位にジャンプアップ。そのプレーぶりから英國紙が付けた「スマイル・シンデレラ」という呼称は19年の彼女の成長を的確に表現している。と、同時に自らランキングポイントグラフで見る成長曲線は国際オリンピックのヒロイン候補に加わるネーミングにもなりそうだ。

世界最高のローリングケース



エアポート セキュリティ V3.0

600mm F4を収納可能



¥56,000(税抜)

レンズを取り付けたグリップ付一眼レフ2台と、レンズを4-6本程度収納可能。最大収納レンズは600mm F4、もしくは500mm F4です。

外寸: H55.9 × W35.6 × D22.9cm
重量: 5.8kg(全オプション装着時)

エアポート インターナショナル V3.0

最も信頼、支持されているローリングケース



¥50,000(税抜)

国際線手荷物基準に適しています。グリップ付一眼レフ2台とレンズ2-4本が収納できます。最大収納レンズは500mm F4です。

外寸: H53.3 × W35.6 × D20.3cm
重量: 5.2kg(全オプション装着時)

エアポート アドバンテージ

重量 2.8kg、シリーズ最軽量



¥30,000(税抜)

非常に軽量化しながらも、保護性、機能性も両立させています。機内持ち込み可能。グリップ付一眼レフ1台、中型一眼レフ1台、レンズ3-4本などを収納できます。

外寸: H49.5 × W32.3 × D18.5cm
重量: 2.8kg(全オプション装着時)

チャレンジJ9活動報告



「チャレンジJ9」発起人の4人。左から廣瀬俊朗、井手口直子、稻澤裕子、村上晃一

MND／ALS グローバルデーにあわせて、銀座の歩行者天国“銀ebra”を楽しんだ、大野均選手(東芝ブレイブルーパス)、児玉健太郎選手(神戸製鋼コベルコスティーラーズ)、そして患者たち



MND／ALS グローバルデーにあわせて、銀座の歩行者天国“銀ebra”を楽しんだ、大野均選手(東芝ブレイブルーパス)、児玉健太郎選手(神戸製鋼コベルコスティーラーズ)、そして患者たち

2019年秋、我が国で開催された第9回ラグビーワールドカップは、日本代表チームが5か国からなるプール戦を全勝。史上初のベスト8となり決勝トーナメントに進む快挙を成し遂げ、日本中がラグビーというスポーツの素晴しさに沸き立ちました。

「チャレンジJ9」は今回のラグビーワールドカップを機に、南アフリカ大会で活躍したスクラムハーフであり神経難病ALS(筋萎縮症側索硬化症)で命を落としたユースト・ファン・デル・ヴェストハイゼンが行った神経難病の支援基金とコラボし、山中伸弥教授が所長を務める京都大学iPS細胞研究所への治療法開発研究への寄付と、患者会への支援を

2本の柱として活動を行いました。

19年2月の日本記者クラブでのキックオフ会見を皮切りに、同6月のMND／ALS グローバルデーにあわせて大野均選手(東芝ブレイブルーパス)、児玉健太郎選手(神戸製鋼コベルコスティーラーズ)によるトークライブには患者も参加し、全員で銀座の歩行者天国の“銀ebra”を楽しみました(写真)。発起人の廣瀬俊朗さんが提唱して全国に広がった「スクラムユニゾン」(各国の国歌を皆で歌う活動)とは、歴史ある洋館「九段ハウス」や、丸の内仲通りに設けられた「丸の内15丁目プロジェクト・KOMINKAN」

でコラボイベントを開催。2015年対南アフリカ戦を描いた映画「ライトンミラクル」試写会などの機会に広く支援を訴え、寄付を募ってきました。

結果、iPS細胞研究所への寄付は約470万円、カンタベリー社製のチャリティTシャツは655枚が完売、寄付金の合計は約600万円となりました。

この活動にご協力下さいました多くの組織の皆様、寄付にご協力頂きました皆様に深く感謝申し上げます。チャレンジJ9としての活動は区切りをつけますが、今後も神経難病支援とラグビーとのコラボチャリティは続けて参る所存です。

編集後記

文/赤木真二

「4年に一度じゃない、一生に一度だ!」

日本初開催となつたラグビーワールドカップ2019のキャッチコピーであります。

今年、2020年の東京オリンピックは一生に一度ではないのか?と問われれば、その答えは「いいえ」です。

私自身、8歳で経験した東京大会の記憶は鮮明です。1964年大会から2020年まで、両方のオリンピックに関わるジャーナリストに話を聞きたい!と思つて実現したのが中谷吉隆氏のインタビューでした。

モノクロフィルム、ベタ焼き、プリントを見ながらのお話は半世紀の時の流れを凝縮した昭和・平成物語であります。80歳を過ぎて尚、撮影を続ける現役カメラマンはフレームをスキニングしたデータをDVDで下さいました。

4×5から35mmフィルム。カラー・ポジからデジタルへ。手段は変われど画像に対する熱意は衰えを知りません。大先輩の撮る二回目の東京オリンピック、今から興味が尽きません。

AJPSマガジン

vol.37

Association Japonaise de la Presse Sportive

制作 赤木真二 牧野龍太郎
デザイン 本多伸二
文字校正 池野聰
広告 竹内里摩子 藤田孝夫
編集 見方 勉

印刷 株式会社 誠晃印刷

発行人 赤木真二

編集・発行所 一般社団法人
日本スポーツプレス協会(AJPS)
〒112-0013
東京都文京区音羽1-21-10
関根ビル603
TEL: 03-3946-9033
FAX: 03-5981-9606
<https://www.ajps.jp/>

※各原稿は2020年1月31日現在の内容です。
本誌掲載記事・写真を無断で転載することは固くお断り申し上げます。

AJPSマガジン vol.37 February 29 2020

定価800円(税込)





Photo by Nick Onken

あなたの世界は、カラフルだ。

Share your world.[™]

大切な記憶はSanDiskと共に。

SanDisk®
sandisk.co.jp